特定非営利活動法人　KAWASAKI アーツ

第４号議案

事 業 報 告 書

自　平成 28 年 4 月 1 日
至　平成 29 年 3 月 31 日

I 事業活動に関する事項

[主催事業]

1．KAWASAKI しんゆり映画祭

■　2016 年度　ボランティアスタッフ説明会

期日：2016 年 5 月 15 日（日）　/　6 月 18 日（土）

会場：川崎市アートセンター　3F コラボレーションスペース

期日：2016 年 5 月 28 日（土）

会場：川崎市中原市民館　会議室

新規ボランティアスタッフ募集を上記日程で実施。今年はスタッフの提案で、中原区でも説明会を実施した。告知期間が短かったこともあり、中原では 3 名の参加となった。
ボランティアスタッフ募集の告知方法は例年どおり、市内公共施設へのチラシ配布、市政だより、映画祭ホームページ、DM 等で行なった。今年も昨年に続き、日本映画へ事務員が伺い大学生向けに説明会の告知を行った。
今年は、前年のように野外と本祭に分けての説明会ではなく、春に全体のスタッフ募集を一度（回数は 3 回）実施した。結果 20 名の方が新たにスタッフとして登録。活動に参加してくれた。
映画祭ボランティアの活動期間は、7 月～11 月。活動セクションは、野外上映会、バリアフリー上映、ジュニア映画制作ワークショップ、宣伝広報、フリーペーパー制作、ホームページ制作、運営サポートスタッフなど。

■　2016 年度　ボランティア全体会

期日：2016 年 3 月～2016 年 12 月

内容：映画祭事業の連絡、各セクションの活動報告・打合せ、ボランティア交流

会場：川崎市アートセンター

ボランティア全体が集まる全体会を月に 1 回程度実施している。映画祭運営委員会で決定された情報の共有や軽作業（ダイレクトメール発送準備など）も行われた。
2016 年度の開催日は 3/12、4/9、5/14、6/11、7/3、8/13、9/10、10/16、10/29、12/3 となった。

■　2016 年度　ボランティアスタッフ研修

期日：2016 年 10 月 16 日（日）　、10 月 29 日（土）

内容：ボランティア研修　～施設利用ガイダンス

会場：川崎市アートセンター（映像館・小劇場）

川崎市アートセンターをメイン会場として映画祭を実施していることから、アートセンター職員の協力を得て施設の特徴や利用方法について、研修を実施した。2 つの会場で使用内容や注意点が異なることもあり、各会場を実際に見ながら使用方法、避難経路の確認、設備の特徴の確認を行った。上映素材の種類、接客のポイントなど多岐にわたり、新規のスタッフはもちろん長年映画祭のスタッフを務めてきたメンバーも改めて再確認を行う場となり、本番前に欠かせないものとなってきている。

■第 17 回ジュニア映画制作ワークショップ

参加希望者向け説明会
期日：2016 年 5 月 28 日（土）、5 月 29 日（日）　/6 月 4 日（土）、6 月 5 日（日）
会場：中原市民館 / 川崎市アートセンター / 高津市民館 / 産業振興会館
映画制作ワークショップ
期間：2016 年 6 月 12 日（日）～11 月 6 日（日）
場所：日本映画大学、川崎市アートセンター、新百合トゥエンティワンホール、
　　市民ミュージアム
参加者数：18 名　（チーム：カニなべ）

川崎市とその周辺に在住・在学している中学生を対象とした映画制作ワークショップを開催。

総合指導に日本映画学校出身で長年ワークショップに技術サポートとして関わって頂いている川久保直貴氏、技術指導に伊東尚輝氏（撮影）を迎え、技術サポートとして日本映画学校卒業生５名が参加して指導が行われた。

５月末より川崎市教育委員会の協力により、市内公立中学校生徒に参加説明会チラシを配布。ワークショップ期間中の出席率の向上や、希望者との意思疎通を図るために、参加希望者は説明会への参加を必須としている。アートセンターの他、川崎市中部の説明会として昨年実施した高津市民館のほか、中原市民館、産業振興会館と、市内全４か所で実施した。

６月 12 日（日）に参加児童と市民ボランティアスタッフの顔合わせとオリエンテーションを行った。同日、川久保講師による脚本指導が始まり、参加生徒同士話し合いながら、作成が進められた。

７月３日（日）には映画技術講座を実施。技術指導の伊東尚輝氏より、日本映画大学にお借りした実際撮影に使用するカメラ等機材の使用方法や映画撮影の方法の講義を受ける。

その後、ロケハンや小道具作成などの撮影準備を経て、７月 24 日より撮影開始。撮影場所は新百合ヶ丘近隣を使用し、撮影は７月 24 日～８月４日の期間に行った。

８月５日より編集作業に入り、参加者全員が編集作業を体験。日本映画大学のスタジオを利用してアフレコ・ＭＡ作業を行い、『学校は二度死ぬ』（34 分）を完成させ８月 22 日に披露試写を行った。

作品完成後は川崎市アートセンターのスタッフの指導・アドバイスにより、11 月の作品発表会へ向けて広報物作成（チラシデザイン作業等）を実施。

11 月６日（日）に KAWASAKI しんゆり映画祭（会場：川崎市アートセンター・アルテリオ小劇場 195 席）にて一般市民対象に完成作品を上映し、参加生徒による舞台挨拶が行われた。

■脚本作成風景

■撮影準備風景

■屋内撮影風景

■ロケ撮影風景

■編集・録音作業風景

■チームかになべ集合写真

■第 17 回 なつやすみ野外上映会　共同主催：麻生区

期日：2016 年 8 月 20 日（土）

場所：川崎市立麻生小学校 体育館

参加者数：538 名（延べ来場者数）

17 回目を迎えた恒例の「なつやすみ野外上映会」を川崎市立麻生小学校の協力のもと、開催した。今年は公開年の新しい作品で、親子で楽しめる作品として『パディントン』（95 分/2014 年/イギリス）を日本語吹き替え版にて上映。

広報活動は、川崎市や麻生区の広報誌への掲載の他、タウン誌や雑誌への掲載、小学校へのチラシ配布等を 7 月より展開。

当日は不安定な天気となり、2011 年以来の体育館での開催とした。当日までに屋外ブレーカー設置、設営用品レンタルなど例年と違う準備を行ったが、雨の為にその準備を活かし切ることができなかった。5 年ぶりとなる体育館での設営だったが、スタッフたちの機転で不足なく行われた。

屋台コーナーは当初 7 店舗で実施予定だったが 2 店舗に縮小し、校門付近で開設された。実施が難しいと思われたゲームコーナーも、上記の理由からスペースが生まれたことで、準備していた上映作品をモチーフにした輪投げ（帽子投げ）ゲームを設置し、多くの親子が訪れ盛況となった。熊本地震の募金活動やイオンシネマ協力によるプレゼント付きアンケートなども実施した。

映画祭代表の千葉による挨拶、北沢区長のご挨拶、来賓紹介に続き、昨年も協力いただいた劇団「company ma」のみなさんの司会でイギリスに関するクイズコーナーを行い、上映前の時間を楽しんで頂いた。

今年度も日本赤十字社へ看護師の派遣を要請したが、観客で体調を崩された方はいなかった。

■会場設営風景

■作製看板の設置

■開場風景

■屋台の様子

■ゲームコーナーの様子

■熊本地震募金活動

■会場内風景

■クイズコーナーの様子

■上映中の様子

■第 22 回 KAWASAKI しんゆり映画祭 2016

□ 本祭実施概要

●主　　催　NPO 法人 KAWASAKI アーツ
●企画・運営　NPO 法人 KAWASAKI アーツ・映画祭事務局
●理　事　長　　藤田朝也
●映画祭代表　　千葉茂樹
●共　　催　川崎市、川崎市アートセンター、川崎市教育委員会、日本映画大学、

（一財）川崎新都心街づくり財団、昭和音楽大学
●後　　援　　「映像のまち・かわさき」推進フォーラム、麻生区文化協会、
（公財）川崎市生涯学習財団、NPO 法人しんゆり・芸術のまちづくり
●協　　力　イオンエンターテイメント株式会社、小田急電鉄株式会社 ほか
●期　　間　　11 月 5 日（土）　～ 11 月 13 日（日）
●会　　場　　川崎市アートセンター・映像館（113 席）、小劇場（195 席）
●上映作品数　29 作品
●登　　壇　　24 名
●総入場者数　2532 人
●ボランティア　　70 名（延べ人数）

2016 年度の KAWASAKI しんゆり映画祭は開催場所を川崎市アートセンター・アルテリオ映像館、アルテリオ小劇場の 2 会場で、開催期間中の月曜日を休映日として 8 日間での開催となった。小劇場では、初日から最終日まですべて稼働させ、映像館も 6 日間連続で稼働し、上映時間枠をすべて使ったプログラム編成が組まれた。5 時間を超える長尺作品鑑賞後に作品助監督と俳優をお呼びして観客も交えた交流会をコラボレーションスペースで行うなど、観客と映画と映画祭がつながるトークイベントを今年も多く提供することができた。　バリアフリー上映や活弁付での名画上映など今までの実績は継承しつつ、川崎市アートセンターと共同主催で活弁上映のチケットで鑑賞可能な映画音楽ミニコンサートを行い、映画と音楽の豊かな繋がりを楽しんでいただける機会を設けることができた。別会場で川崎市文化財団と共同主催で映画作品を元ネタにした落語「シネマ落語」とトークライブを合わせたイベントを開催する等、地元の団体と連携を深め、新たな映画の楽しみ方を提案できた。また、昨年より実施している地域のお店と連携してオープンしている「シネマウマカフェ」では、ジュニア映画制作ワークショップ参加中学生が作品にちなんだメニューを、プロの出店者と共同開発する等、新たな展開も見られた。

■ 4 月～8 月 プログラム選定

昨年までは、ボランティアスタッフにより構成されたプログラム委員会（8 名程度）が映画祭上映作品を合議により選定していたが、今年より新たな試みとして総勢 60 名の全スタッフより公募を募り、プレゼンテーションの後、投票して上位作品を選出するという方法を取り入れた。結果、例年よりもスタッフと作品、スタッフとスタッフの距離が縮み、宣伝や美術制作にもより多くの熱量を持って取り組むメンバーが増えた印象。また、プログラム委員は、継続枠の作品選定や全体の調整等を 4 月～8 月まで定期的に会議を実施し確定させた。

■ 8 月～10 月 広報宣伝物、WEB ページ等の作成

プログラム決定を受け、チラシ・フリーペーパーの制作やホームページ・Facebook・twitter の更新等が行われた。今年より、昨年までのフリーペーパーを廃止し、3 つ折りリーフレットを 4 つ折り観音開きリーフレット 1 種類に変更。例年より早い時期から、よりこまめに配布ができた。

■ 9 月～11 月　広報活動

映画祭がスタートした 1995 年から実施している駅前でのポスター展を今年も実施した。また、イオン新百合ヶ丘の協力により、小田急線車内から見やすい位置に垂幕を掲示したり、川崎市の協力による川崎駅アゼリアビジョンでの予告編の放映、麻生区の協力による駅前のバスターミナルの柱巻広告も実施された。小田急電鉄の協力による駅構内への映画祭ポスターの掲示、小田急バスの協力によるバス内の吊り下げチラシの設置など実績のある広報を中心に展開され、麻生区役所でもポスター展を行うなど広報の幅を広げる取り組みも並行して行われた。また、映像のまち・かわさきの一環で、川崎大師ゆめシネマとの連携で予告編の上映等も実施した。

■街頭でのチラシ配布風景

■他団体とも PR の場で交流が持たれた

■屋外ポスター掲示

■イオン駐車場の横断幕

■南口ターミナルの柱巻広告

□ 10 月 8 日～11 月 13 日　宣伝ボード等の設置　（会場：川崎市アートセンター）

会場となる川崎市アートセンターにおいて個別作品の宣伝ボードを設置し、作品の告知とチケット販売の促進を図った。作成は各作品担当の市民プロデューサーを中心に行われた。

□ 10 月 15 日～11 月 13 日　ポスター展　（会場：イオンシネマ新百合ヶ丘）

イオンシネマ新百合ヶ丘の協力により、映画祭上映作品のポスター展を開催した。2016 年度はイオンシネマでの貸館上映を行わなかったが、館長の理解により実施することができた。

■ポスター展設置風景

■イオンシネマ内ポスター展

□　10 月 23 日～11 月 13 日　ポスター展　（会場：麻生図書館）

麻生図書館の協力により、映画祭の開催期間に合わせて、イオンシネマ新百合ヶ丘、アルテリオ映像館、KAWASAKI しんゆり映画祭で上映される作品の合同ポスター展を行った。しんゆり映画祭の上映作品に関連した蔵書を集めた企画棚の設置も行われた。関連本を読んで来場されたお客様もおり、宣伝の効果が実感できた。

■麻生図書館ポスター展

□ 10 月 1 日　第３回ゆめシネマ上映会での映画祭告知予告編上映と挨拶
（会場：川崎大師仲見世通商店街「住吉」前）

映像のまち・かわさきのつながりで市に紹介していただいた、「かわさき楽大師プロジェクト実行委員」のシネマ部会と連携して、ゆめシネマで市民スタッフが口頭でのご挨拶・告知をさせていただき、しんゆり映画祭の予告編を上映していただいた。ゆめシネマの告知広告は当映画祭の野外上映会チラシ裏面下部に掲載することで、相互に広報宣伝で繋がり、川崎市を映像のまちとしてより盛り立てる連携の一歩となった。

■川崎大師ゆめシネマとコラボ

□　10 月 9 日　あさお区民祭りでの PR 活動　（会場：麻生区役所前広場）

あさお区民祭りにてブースを借り、チラシの配布などを行った。今年はチラシ配りだけでなく、雨で使用できなかった野外上映会用のゲームをお子さま向けに実施。チケット発売開始とタイミングが重なった為、アートセンターのチケット販売ブースへの誘導など行うことができ、有効な PR 活動を行うことができた。

■あさお区民まつりでの広報風景

□　10 月 22 日　しんゆりマルシェでの PR 活動

NPO 法人しんゆり・芸術のまちづくりの協力のもと、新百合ケ丘駅周辺で行われるイベントにおいて、PR 活動及び、プレイベントを行った。スペシャルステージ上で昭和音楽大学学生によるサックス四重奏 pur saxophone quartet のライブ演奏後、スタッフによる映画祭開催 PR を行った。ジュニアワークショップの参加生徒も PR 活動に参加し、映画祭上映作品ポスター持参で、ジュニア作品チラシの配布などを行い、内容の濃い PR 活動となった。

■しんゆりマルシェステージでの昭和音楽大学と連動した宣伝風景

□　11 月 5 日～11 月 13 日　開催会場内でのフォトスポットの設置

映画祭スタッフの発案により、映画祭開催期間中の来場者にフォトスポットを提供し、SNS などを通して映画祭の PR を行っていった。来場者の他、トークにお呼びしたゲストにも使っていただくことができ、

映画祭の盛り上げにも効果をあげることができた。フォトスポットに設置した数々の小道具はスタッフによる手作りで、市民映画祭である「KAWASAKI しんゆり映画祭」らしい温かみある空間となった。

■インスタグラム風ボードの設置　　■ゲストにもご協力いただきました

□　KAWASAKI しんゆり映画祭 PR 動画の公開

映画祭のマスコットキャラクター「シネマウマ」を使って動画を作成し、ユーチューブで公開。映画祭に協賛いただいている地元企業の紹介をするとともに、地元に根付いた映画祭としてより広く、たくさんの人たちに知ってもらうための施策として、初めての試みを行った。

協力店舗：「カンガルー」、「パティスリー・エチエンヌ」、「株式会社アキュセラ」「株式会社川崎フロンターレ」「シノワーズ」「ノボルノバル」「ＪＡセレサ川崎・セレサモス麻生店」

■PR 動画撮影風景

デート編　https://www.youtube.com/watch?v=mIyWiubQITQ

アルバイト編　https://www.youtube.com/watch?v=LG_JGRr_y0Y

■ 映画祭 11 月 5 日～11 月 13 日　（会場：川崎市アートセンター）

川崎市アートセンターの映像館、小劇場を利用し国内外の秀作を上映。今年は昨年にも増して、日本映画の秀作が多く、今年初めて実施したスタッフ全員参加の公募・投票でも邦画を中心に作品がセレクトされ、「躍動！日本映画！」というキャッチコピーのもと広報を展開した。土日・祝日を中心に上映作品にちなんだゲストを招き、それぞれ担当の市民プロデューサーが企画したトークイベントなどを実施した。チケット販売や観客誘導などの会場運営についても、川崎市アートセンターの協力のもと、市民ボランティアを中心に行われた。

また今年は、新百合ヶ丘を映画のまちとするべく 20 年以上前から撒き続けてきた種が、花を咲かせつつあることを実感できる上映作品が多く並んだ。映画祭の生みの親である今村昌平監督の特集に始まり、若手監督応援特集で上映した３作品のうち１本は、地元新百合ヶ丘出身で子ども時代からしんゆり映画祭にも家族でよく来場してくださっていたという監督の作品。またもう１本は過去に当映画祭のジュニア制作ワークショップに参加した経験のある監督の作品。さらに、日本映画学校・大学の特集では、しんゆり映画祭スタッフとして関わってくれていたメンバーの脚本が卒業制作作品に選ばれ、上映できた。また、各監督・脚本家にはゲストとして登壇していただき、ゲスト本人にも映画祭スタッフとしても、地元市民としても、一緒に育った、育てた、育てられた関係性がひとめぐりして、共有できたことは、市民映画祭を続けてきたことの一つの結果として意義深い上映・イベントとなった。

■千葉代表による開催挨拶

■ロビー風景

■ロビー飾りつけ風景

■『カンゾー先生』柄本明さん

■『SHARING』篠崎監督・山田さん

■『さようなら』深田監督

■佐藤忠男さんによる映画評論講座

■映画大学特集上映後のトーク

■『マザーテレサと生きる』

■『走れ、絶望に追いつかれない速さで』／『Every Day』／『脱脱脱脱 17』監督たちによるトーク

【特別企画】

□　11 月 5 日「映画監督・沖田修一 劇作家・前田司郎 ～ふたりは同級生～」

今年のスタッフ企画公募で上映が決まった本企画において、沖田監督『モヒカン故郷に帰る』、前田監督『ふきげんな過去』の連続上映後に、両監督をお呼びしてのトークが行われた。トーク後は企画の１本として公開の機会が少なく一般流通でソフト化がされていなかった『La fuosaje　ラ・フォサージュ　～愛をつく女～』を、監督ご本人の手元にあった上映素材をお借りして上映することができた。両監督が共同監督を行った本作をぜひ上映したいという企画者の熱意で実現することができ、両監督のファンに対して貴重な鑑賞の機会と時間を提供することができた。

■沖田監督・前田監督トーク

□　11 月 6 日　ジュニア映画制作ワークショップ発表会　（会場：アルテリオ小劇場）

今年度も「ジュニア映画制作ワークショップ」の完成作品発表会をアルテリオ小劇場にて実施。制作に関わった中学生や家族のほか、一般の観客も鑑賞に訪れた。完成作品『学校は二度死ぬ』（34 分）とメイキング映像の上映後、日本映画大学学長で映画評論家の佐藤忠男さんからの講評、参加した中学生の舞台挨拶、指導講師による講評を行い、今年のワークショップの様子を振り返った。昨年に引き続き、発表会の内容決めや進行も中学生のアイデアをもとに行われ、今年は来場者に配布するオリジナルパンフレットも自分たちの手で作成するなど、その年度の参加生徒のアイデアや熱意に応えることができるのは、長期間のワークショップである事と、それを支える映画祭ボランティアスタッフがいてこそ実現できることだと思われる。また、終演後は参加者全員ロビーに出て、来場された観客一人一人に感謝を込めて見送りを行った。（来場者数 191 名）

■中学生作成活動記録展示

■参加生徒による舞台挨拶

■カフェとのコラボ

□　11 月 6 日　『世界三大喜劇王』　弁士：澤登翠　（会場：アルテリオ小劇場）

今年は「世界三大喜劇王」と題して『ロイドの巨人征服』『チャップリンの番頭』『キートンの警官騒動』の中・短編 3 本立てで、活弁上映を行った。澤登さんは怪我の為、車椅子での登場となったが、毎年の名調子はそのままで観客を大いに楽しませてくれた。上映後は、映画祭顧問の白鳥あかねと澤登さんによるトークショーも行い、作品の時代背景などについても理解を深める機会となった。上映終了後は、川崎市アートセンターとの共同主催「カルテットシスレー」による弦楽四重奏のミニコンサートが行われ、活弁上映の観客は無料で入場できるサービスを提供することができた。

■活弁上映後のトーク

■活弁鑑賞特典コンサート

□　11 月 8 日（火）、11 日（土）、13 日（日）　バリアフリーシアターの実施

●保育付上映

11 月 8 日（火）上映の『はじまりのうた』『ふきげんな過去』に関して、6 ヵ月～4 歳までのこどもを預かる託児サービスを実施。保育グループ「ジャンケンポン」と提携して実施し、保育者を 3 名派遣してもらい、映画祭スタッフとともに保護者の映画鑑賞時間中、こどもを預かった。

●副音声ガイド付上映

11 月 8 日（火）、11 月 13 日（日）の『百円の恋』上映に関して、視覚障がい者向けの副音声ガイドを映画祭独自に制作し・提供を行った。11 月 13 日の上映会では映像館が満席となり、副音声ガイド利用者とそれ以外の観客が同時に作品を楽しむというバリアフリーシアター発足時の理想に近い上映を行うことができた。武監督と脚本家の足立紳さんをお呼びしてのゲストトークを行い、ゲスト呼び込みを映画にちなんでボクシングのリングアナウンス風にするなどトークイベントも大いに盛り上がった。（サービス利用者数・15 名）

■副音声ガイド録音風景

■ガイド用ラジオ貸出風景

■トーク風景：武監督・足立紳さん

●日本語字幕付上映

11 月 11 日（金）に上映した『エール！』に関して、配給元より聴覚障がい者用日本語字幕付き素材の提供を受けて実施した。広報にあたっては、昨年同様川崎市聴覚障がい者情

報文化センターの協力を得て、NPO 法人川崎市ろう者協会及び川崎市中途失聴・難聴者協会の広報誌への掲載した結果、利用者の来場があった。

□　11 月 11 日　ハッピーアワー交流会　（会場：3F コラボレーションスペース）

今年度の上映作品『ハッピーアワー』は 5 時間を超える長尺映画だった為、同じ作品を全て見終わったときの達成感や連帯感をイベントに昇華したいと考え、交流会が企画された。ゲストに作品の出演者である渋谷采郁さんと、助監督を務めた高野徹さんをお呼びし、トークイベントとはまた違ったゲストと参加者との交流をより深く提供することができた。

■『ハッピーアワー』交流会

□　11 月 12 日　がまだせ！熊本応援上映　（会場：アルテリオ小劇場）

2016 年 4 月の熊本地震で甚大な被害を受けた地元を応援しようと考えた行定勲監督が自身の監督作品の上映を通して復興支援を呼びかけていることで話題の映画『うつくしい人』を、『くまモンの休日（ＣＭ）』と 2 本立てで当映画祭でも上映を行った。入場料収益は上映素材提供元のコミュニティシネマセンターを通じて熊本県へ送金された。上映後は映画祭スタッフが用意した熊本物産品の販売なども行い、観客の多くに利用していただくことができた。

■「がまだせ熊本！応援」コーナー

□　11 月 5 日（土）～11 月 13 日（日）　シネマウマカフェ　（会場：3F コラボスペース）

昨年度に引き続き、上映会場であるアートセンター3F コラボレーションスペースにおいて、近隣の飲食店と提携した「シネマウマカフェ」を開設した。日替わりでパンやお弁当、

コーヒーなどの提供を行い、来場者に地元のお店を紹介し、その味を楽しんでもらうことができた。11/6 の「Café Sante」出店時には当日に上映を行ったジュニア映画制作ワークショップ作品『学校は二度死ぬ』とコラボレーションメニューとして、中学生と共同開発した作品にちなんだオリジナル商品を販売し、上映後の参加中学生が販売を手伝う場面もあった。

■「シネマウマカフェ」地元飲食店とのコラボレーション企画

参加店舗「カンガルー（新百合ヶ丘）」、「パティスリー・エチエンヌ（新百合ヶ丘）」、「cafe Sante（百合ヶ丘）」、「NARUTO Coffee&Roasters（狛江）」、「ムビリンゴ（読売ランド前）」、「ひこばえパン屋（読売ランド前）」、「ベーグルカンパニー（向ヶ丘遊園）」、「ボンヴィボン（青葉台・新百合ヶ丘）」

□　11 月 12 日　『シネマと談志と永六輔』　（会場：新百合 21 ホール）

新百合 21 ホールと映画祭のコラボレーションとして『シネマと談志と永六輔』が新百合 21 ホールで行われた。出演者の立川志らくさんと松元ヒロさんで、志らくさんによる映画「天国から来たチャンピオン」を下敷きにした「シネマ落語」が披露されるなど、映画とは違うジャンルで映画祭を盛り上げるイベントが実施された。

■「シネマと談志と永六輔」チラシ

<u>第 22 回　ＫＡＷＡＳＡＫＩしんゆり映画祭 2016 上映作品</u>

第４号議案

◇リーフレットキャッチコピー　「躍動！日本映画！」

≪特集 2016 年の顔 菅田将暉≫
『セトウツミ』『ディストラクション・ベイビーズ』『共喰い』
≪新百合ヶ丘ゆかりの映画監督 今村昌平 生誕 90 年 没後 10 年≫
『カンゾー先生』『にっぽん昆虫記』
≪映画監督・沖田修一、劇作家・前田司郎～ふたりは同級生～≫
『モヒカン故郷に帰る、『ふきげんな過去』『La fuosaje ﾗ･ﾌｫｻｰｼﾞｭ ～愛をつく女～』
≪しんゆりセレクト「若手監督応援します」≫
『走れ、絶望に追いつかれない速さで』『Every Day』『脱脱脱脱 17（ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ･ﾊﾞｰｼﾞｮﾝ）』
≪その先に、見える世界。≫
『さようなら』『SHARING』
≪R180～見逃すのはもったいない！長尺日本映画傑作選～≫
『リップヴァンウィンクルの花嫁』、『ハッピーアワー』
≪スクリーンで観たい永遠の名作≫
『ニュー・シネマ・パラダイス ｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ版 ﾃﾞｼﾞﾀﾙ･ﾚｽﾄｱ･ﾊﾞｰｼﾞｮﾝ』
≪聖人マザー・テレサにまなぶ≫
『マザー・テレサと生きる』
≪ジュニア映画制作ワークショップ発表会≫
『学校は二度死ぬ』
≪しんゆりバリアフリーシアター≫
『百円の恋』（視覚障がい者向け副音声ガイド付き上映）
『エール！』（聴覚障がい者向け日本語字幕付き上映）
『はじまりのうた』（保育付き上映）
≪日本映画学校、日本映画大学から巣立った才能≫
『水際の魚』『good-bye』
≪東京フィルメックス in しんゆり≫
『風櫃（ﾌﾝｸｲ）の少年』
≪佐藤忠男が語る≫
『台湾新電影時代』
≪活弁上映　世界三大喜劇王≫
『ロイドの巨人征服』『チャップリンの番頭』『キートンの警官騒動』/活弁士澤登翠
≪がまだせ熊本！応援上映≫
『うつくしいひと』『くまモンの休日（CM）』

合計 29 作品（※中・短編含む）

登壇者　（敬称略、順不同）

柄本明（俳優）、真利子哲也（監督）、深田晃司（監督）、前田司郎（監督）、沖田修一（監督）、大森立嗣（監督）、佐藤忠男（映画評論家）、足立紳（脚本家）、武正晴（監督）、篠崎誠（監督）、山田キヌヲ（俳優）、手塚悟（監督）、土屋壮（俳優）、羽生敏博（監督）、近藤希実（脚本家）、高野徹（監督）、渋谷采郁（俳優）、冨士原直也（俳優）、鈴木規史（俳優）、松本花奈（監督）、
中川龍太郎（監督）、澤登翠（活動弁士）、白鳥あかね（スクリプター）、千葉茂樹（映画祭代表）

合計 24 名

動員数データ

チケット売上枚数　2169 枚
観客動員数　2532 名
有料プログラム数　24 プログラム（26 作品）
上映プログラム数　26 プログラム（29 作品）
合計上映回数　47 回
1 日あたりの平均集客数　全日 317 名　／　休日 352 名　／　平日 282 名
1 作品あたりの平均集客数　97 名

今年度の総括と来年度への取組み

2016 年度は上映作品 29 作品中、有料上映 24 プログラム（26 作品）、無料上映 2 プログラムとなった。会場を川崎市アートセンター映像館・小劇場の 2 会場として開催して 2 回目となる。11/5（土）～11/13（日）で開催し、期間中の 11/7（月）は休映日とした。

単体上映回では 11/12 の「セトウツミ」が 1 番の有料入場者数を記録した。要因として主演の菅田将暉さんの人気によるものと考えられ、普段のしんゆり映画祭の観客以外を呼び込むことに成功したことが大きかったと思われる。今年度からプログラム選定に関して、映画祭スタッフからの公募制と投票制を採用した上映枠が設けられ、その投票で 1 位をとった企画から有料入場者数 1 位の作品がでてきたことは、大いに評価できる事象だったように思われる。

また、今年はしんゆり映画祭でバリアフリーシアターをはじめて 20 周年となり、継続して行われている独自作成した副音声ガイドをつけての上映と、保育サービスのほかに聴覚障がい者向け日本語字幕付き上映が行われた。11/13 の『百円の恋：副音声ガイド付上映』では、映像館が満席となり、副音声ガイド利用者とそれ以外の観客が同時に作品を楽しむというバリアフリーシアター発足時の理想に近い上映をできたことは、長年バリアフリーシアターを支えるスタッフにとっても喜ばしいことであった。20 年の歴史を年表にして掲示したり、関係者へのインタビューなども行うことができ、会場内外で活動の PR を行うことができた。

広報については、例年行っている川崎市と麻生区を通しての媒体の他、昨年実績のある麻生区協力による柱巻き広告や小田急電鉄の協力による駅構内のポスター設置、小田急バスの協力によるバス内吊り下げチラシの設置も継続して行われた。ボランティアスタッフによる地域イベントに直接出向いてのチラシ配りは、昨年に引き続き積極的に実施された。

今年度は特に地域の他団体とのつながりが持てた年であり、新百合 21 ホールとのコラボレーション企画として行われた「シネマと談志と永六輔」では落語とトークショーが行われ、川崎市アートセンターとの連動企画として音楽コンサートの実施、川崎南部の大師で行われている「ゆめシネマ」での PR など、各団体とつながりを持つきっかけを得ることができた。このつながりを活かして今後も継続・拡大させていきたい。

今年は昨年の反省やスタッフ内部からの声を受けて、プログラム選定方法の改訂や作業の見直しなど映画祭内の組織の改編が行われた。今年度から映画祭のボランティアとして参加されるスタッフから参加費（2000 円）を集めることをはじめ、参加費を払ったスタッフにはプログラム企画提案と投票の資格が与えられることになった。上記などにより作業内容の偏りなどは改善されてきたが、作業量の分担や映画祭内の作業セクション毎の情報共有などは改善の余地があり、持続可能な組織作りをさらに進めていきたい。

以上

[企画・制作事業]

第４号議案

１．バリアフリーシアター制作事業

１９９７年より活動している「バリアフリーシアター制作」は 20 周年を迎えた。

（1）アートセンター委託制作
日本映画２本、外国映画２本に対して音声ガイドを制作した。
川崎市アートセンターは、視覚障がい者が音声ガイド付き（場面解説＋日本語吹替）外国映画を劇場で鑑賞できる全国的に見ても数少ない劇場である。

（2）しんゆり映画祭のバリアフリーシアター
広報面では、　20 周年を期に漫画で足跡をたどった。公式チラシ（■実験劇場の巻）～公式 HP（■漫画で描く「しんゆりバリアフリーシアター」のはじまり・■年表：「しんゆりバリアフリーシアター」20 年のあゆみ～音声インタビュー（さんざし代表武村佳子さん https://youtu.be/ROHcUeT8sXM）と連動させた。
本祭のバリアフリーシアターとして、視覚障がい者向けとして日本アカデミー賞他各賞を受賞した『百円の恋』に音声ガイドを付けた。武 正晴監督と脚本家の足立 紳さんをお招きし多くの来場者があった。聴覚障がい者向けとしてフランス映画「エール！」をバリアフリー日本語字幕付きで上映。来場者は多くなかったもののアンケートの回答は「非常に満足した」がほとんどだった。保育サービス付きとして「はじまりのうた」「ふきげんな過去」を上映した。

【本年度の制作した作品】
■川崎市アートセンターからの委託制作およびバリアフリー上映協力
『モヒカン故郷に帰る』　音声ガイド台本制作
『ミラクル・ニール！』　音声ガイド台本制作/日本語吹替
『未来を花束にして』音声ガイド台本制作/日本語吹替
『お父さんと伊藤さん』音声ガイド台本制作

■第 22 回 KAWASAKI しんゆり映画祭・制作・上映
『百円の恋』　音声ガイド台本制作（収録）

（3）バリアフリーシアターを取り巻く状況の変化
UDCAST（音声ガイドアプリ）が実験段階から普及の兆し
SNS の利用（ツイッター、ファイスブック、HP）情報発信、人材募集

2. 劇団わが町

アートセンター創設時より、ふじたあさや中心に企画していた市民のための市民による新百合ヶ丘の市民劇団。

2012 年 6 月に生まれた新しいゆるやかな劇団。劇団員は地域住民の方々、総勢約 60 数名。年齢制限はなく、現在 9～79 歳までのメンバーが所属。しんゆりシアターのラインナップの一翼を担い、長期的に様々な創造活動を行なっている。

■しんゆりシアター 劇団わが町 第 6 回公演
「恐れを知らぬ 27 人の劇作家？と 49 人の俳優たち」

開催期間 ： 2017 年 3 月 10 日（金）～12 日（日）　5 回公演
会場 ： 川崎市アートセンター　アルテリオ小劇場

2012 年より始まった劇団わが町、指定管理第一期の最終公演。
「ブレヒトは『第三帝国の恐怖と貧困』で、生活の断片を積み重ねてナチス・ドイツの犯罪を告発したが、それにならって、劇団わが町で、今の自分たちを脚本にしてみないか」との演出家の問いかけから始まった第 6 回公演は、27 人が書いた脚本を採用したオムニバス形式の作品となった。

27 人の劇作家の中には、小学生・フリーター・ビジネスパーソン・シルバー世代と、様々な立場や年齢の団員がおり、既存の脚本づくりに捕らわれない、市民の暮らしや営みから生まれた自由で多様性豊かな作品が揃った。全て一から団員が書いたオリジナル脚本となり、演出のふじたあさや（アーツ理事長）が構成しひとつの舞台作品として完成した。

劇団わが町では、2014 年の第三回公演『夢みる人』より、劇団員たちが脚本作成に参加しており、2015 年『ザ・チェーホフ』公演での活動も経た、今回の公演ではその積み重ねが市民劇団を最大限活かしたかたちで結実したと言える。

また、脚本だけでなく、役者としての演技、裏方作業、劇団内のチームワークも、2012 年からの第１期メンバーと 2014 年からの第２期メンバーの垣根がなくなり、全体に助けあい、補い合い、切磋琢磨する場面が随所に見られ、５年間の集大成としても本公演は成功を収めたと言える。

芸術文化を受け取る側と発信する側のクロスオーバー、及び地域の文化を育てていく、劇団の当初の狙いを上回るかたちで、市民が自主的に参加し地域に発信していく力を自ら育むことができた５年間となったと言える。

前公演に引き続き、当法人は本公演の企画・制作を担った。

[主催事業]

１．company ma　劇団「間」第２回公演

『ふたつのつばさ』

開催期間 ： 2016 年 12 月 10 日（土）～11 日（日）　４回公演
会場 ： 川崎市アートセンター　アルテリオ小劇場

作　アン・ネグリ
演出・美術・翻訳　大谷 賢治郎
音楽・演奏 青柳 拓次

出演・大谷 恵理子、原田 亮、森山 蓉子、庄崎 真知子(劇団銅鑼)、土井 真波(劇団銅鑼)

劇団わが町公演で、ワークショップ講師・演出補を担当し、アーツ理事でもある大谷賢治郎主宰の劇団「間」company ma。
旗揚げ公演として上演された『雨ニモ負ケズ』に続く、劇団の第２作目は１作目と違い台詞のあるストレートプレイ。

アメリカの公立小学校で演劇を教える新進劇作家、アン・ネグリによる作品。アメリカ国内にて数々の児童演劇の賞を受賞している。鳥の家族の物語を通して、障がいや個性について観客に問いかける作品。本邦初上演。

company ma は、「子どもが笑えば、世界は笑う」を合言葉に、新百合ヶ丘を拠点に活動を始動させた。

出演者には、劇団わが町のメンバーや毎回客演として出演している役者・ダンサーが参加。KAWASAKI アーツでは、公演を主催、制作業務を担当した。

公演来場者には親子客が多く見られ、こどものみならず大人にも大変好評であった。

総動員数は、４回公演で 487 人。初回である第一回目より 100 人ほどの増員となった。
[委託事業]

２．宮前区社会福祉協議会　福祉大会　映画上映

川崎市宮前区社会福祉協議会主催の「福祉大会（平成 28 年 11 月 20 日（日）宮前市民館大ホールにて開催)」における映画『あん』の上映のコーディネート、当日映写、バリアフリー（副音声ガイド）対応を担った。
当日は 00 名のホールが満席となる大盛況。
バリアフリー上映の副音声ガイドのサービスは、過去にしんゆり映画祭で過去にお世話になった、シティライツに委託。
今回その経験と繋がりが活用できた機会となった。

[協賛事業]

「平成 28 年度あさお芸術のまちコンサート」に、名義等で協賛を実施した。

II 運営組織の状況に関する事項

１．事務局運営

例年の年間の事務局の業務予定は、映画祭事業 4 月～11 月、12～3 月わが町公演、合間に委託事業等といったスケジュールで行ってきたが、ここ 2 年ほどで業務や事務員勤務体系が変化したため、12 月～5 月上旬までの事務局業務処理が 1 名では遅れたり手が回らない部分が生じている。（特に決算・映画祭始動が重なる 3 月以降）映画祭終了後のボランティアスタッフの確保や、年間を通じての活動業務の配分を再検討する必要がある。
現在、年間を通じて事務局が運営可能となっているのは、映画祭のボランティアスタッフが業務の一部を担っていることによる部分もあり、ボランティアスタッフに負担がかかりすぎないよう注意が必要な状況は変わらない。

資金運営面でも法人事務局員の冬期の給与や、事務局の家賃を含む管理費は映画祭から捻出されているため、映画祭の収益が法人の運営に直接関わる。
映画祭の収入源増のために、寄付金の募集（クラウドファウンディング、メセナ協議会制度の利用)、協賛広告の増加の努力を行っているが、限界があるため、平成 28 年度は映画祭のボランティアスタッフから年間 2000 円の参加費を徴収することを映画祭運営委員が決定した。
参加費を導入したことでスタッフが減少する当初の懸念は、40 名の既存スタッフに加え、20 名の新規スタッフが加わる結果から見て、ある程度払しょくされた。しかし、ボランティアスタッフは流動的な為、参加費徴収継続については検討の余地を残している。

２．事業展開

平成 28 年度は、映画祭事業、の他の文化事業は、バリアフリー副音声日本語吹替え制作、劇団わが町企画・制作、company ma 公演の主催といった前年度とほぼ同内容の事業展開となった。

また麻生区から委託が外れた「福祉まつり」の上映会を、宮前区より受けたため、法人としての収入が若干戻った。今後も依頼を受けられるよう努める。

３．役員

（１）役員の氏名及び職制上の地位

地　　位	氏　　名	専　　門
理　事 長	藤田 朝也	演劇・ミュージカル
専務理事	白鳥 あかね	映画・映画祭
理　　事	黒田 隆	音楽
理　　事	千葉 茂樹	映画・映画祭
理　　事	森　正敏	演劇
理　　事	安岡 卓治	映画・映画祭
理　　事	瀧澤 春江	映画祭・バリアフリーシアター制作
理　　事	岩倉 宏司	宣伝・広報
理　　事	大谷　賢治郎	演劇
理　　事	徳沢　純子	映画祭
監　　事	田島 俊明	行政
顧　　問	佐藤 忠男	映画評論家
顧　　問	中島 豪一	川崎新都心街づくり財団評議員
シニア・アドバイザー	下八川 共祐	昭和音楽大学理事長
	岩崎 敬	環境デザイナー

活動計算書

28年4月1日から29年3月31日まで

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

（単位：円）

科目	金額		
Ⅰ 経常収益			
1. 受取会費			
会員受取会費	152,000	152,000	
2. 受取寄附金・協賛金			
受取寄附金	773,665		
受取協賛金	459,200	1,232,865	
3. 受取助成金・委託金等			
川崎市負担金	6,880,000		
日本芸術文化振興助成金	1,151,000		
麻生区地域振興課　区委託金	964,200		
文化財団委託金	324,000		
その他助成金・委託金	513,358	9,832,558	
4. 事業収益			
①芸術文化をとおしたまちづくり事業(映画祭事業)		3,407,928	
チケット販売物販収入	2,397,428		
広告収入	830,000		
ジュニア参加費	180,500		
②文化芸術振興に関する収入		520,000	
バリアフリー委託費（文化財団）	520,000		
映画製作費収入			
その他業務委託収入			
5. その他収益			
受取利息	37		
雑収益	255		
借入金債務免除益		292	
経常収益計			15,145,643
Ⅱ 経常費用			
1. 事業費			
(1) 人件費			
給料手当	4,790,565		
法定福利費	63,855		
福利厚生費	383,406		
謝礼	955,921		
人件費計	6,193,747		
(2) その他経費			
フィルム仕入	1,924,444		
その他仕入	466,072		
広告宣伝費	118,150		
リース料	126,825		
地代家賃	1,627,769		
事務用消耗品費	212,257		
通信交通費	790,484		
租税公課	0		
交際費	45,473		
保険料	97,900		
備品消耗品費	123,176		
外注費	376,100		
会議費	628,487		
機材費	565,586		
製作費	91,174		
印刷費	1,210,662		
記録費	89,270		
その他経費等	558,917		
その他経費計	9,052,746		
事業費計		15,246,493	

2. 管理費			
(1) 人件費			
役員報酬	0		
給料手当	0		
法定福利費	0		
退職給付費用	0		
福利厚生費	0		
謝礼	0		
人件費計	0		
(2) その他経費			
フィルム仕入	0		
広告宣伝費	0		
旅費交通費	0		
地代家賃	0		
その他経費等	0		
その他経費計	0		
管理費計		0	
経常費用計			15,246,493
当期経常増減額			-100,850
Ⅲ 経常外収益			
1. 固定資産売却益		0	
経常外収益計			0
Ⅳ 経常外費用			
1. 過年度損益修正損		0	
		0	
経常外費用計			0
税引前当期正味財産増減額			-100,850
法人税、住民税及び事業税			70,000
当期正味財産増減額			-170,850
前期繰越正味財産額			2,526,883
次期繰越正味財産額			2,356,033

貸借対照表

平成29年 3月31日　現在

特定非営利活動法人　KAWASAKIアーツ　　（単位：　円）

資産の部

【流動資産】

現金及び預金	2,142,042	
未収入金	1,151,000	
流動資産合計		3,293,042
資産の部合計		3,293,042

負債の部

【流動負債】

短期借入金	566,308	
未払費用	206,556	
未払法人税等	70,000	
預り金	94,145	
流動負債合計		937,009
負債の部合計		937,009

純資産の部

【株主資本】

利益剰余金		
その他利益剰余金		
非営利事業に係る繰越利益	5,139,826	
繰越利益剰余金	-2,783,793	
その他利益剰余金合計	2,356,033	
利益剰余金合計	2,356,033	
株主資本合計		2,356,033
純資産の部合計		2,356,033
負債及び純資産合計		3,293,042

財産目録

29年3月31日現在

特定非営利活動法人　KAWASAKIアーツ

（単位：円）

科目	金額		
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現金	569,483		
預金	1,572,559		
未収入金	1,151,000		
流動資産合計		3,293,042	
2．固定資産			
（1）　有形固定資産			
車両運搬具	0		
什器備品	0		
その他有形固定資産	0		
有形固定資産計	0		
（2）　無形固定資産			
ソフトウェア	0		
	0		
無形固定資産計	0		
（3）　投資その他の資産			
敷金	0		
投資その他の資産計	0		
固定資産合計		0	
資産合計			3,293,042
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
未払金	0		
短期借入金	566,308		
未払費用	206,556		
未払法人税等	70,000		
預り金	94,145		
流動負債合計		937,009	
2．固定負債			
長期借入金	0		
退職給付引当金	0		
固定負債合計		0	
負債合計			937,009
正味財産			2,356,033